

あとがき——『近代文学 研究と資料』復刊に添えて

金井 景子

ここに『近代文学 研究と資料』第二次第一集をお届けする。第二次と名乗るからには、第一次があるわけで、まずは第一次の紹介からさせていただきます。第二次と名乗るからには、第一次があるわけで、まずは第一次の紹介からさせていただきます。

第一次『近代文学 研究と資料』が創刊されたのは、一九七五年五月のことである。一九八一年九月に十二号が出たあとに休刊して、今日に至っている。今回、この研究誌を復刊しようと提案した千葉俊二さんは初期のころ、賛同した私・金井景子は最後のころの執筆者である。

創刊号の奥付には「早稲田大学大学院文学研究科紅野ゼミ」とある（後に、十一号と十二号とは、紅野研究室と竹盛研究室の両方が併記されている）。寄せられた論文は六本、資料が一編、書評が一編。「あとがき—研究メモ一面」で紅野敏郎先生は創刊の主旨を次のように記している。

◎ 大学院修士課程のゼミの諸君とこのような小冊子を出すことになった。

ゼミの勉強の一環、という考えかたに立ってのことである。従ってゼミの参加者はなんらかのかたち

で必ずこの小冊子に論考を発表する、私も書く、ということとなる。またこのゼミの課程を終えた人も直接、間接、なんらかのかたちで協力する、というとりきめである。

この小冊子のつくりかたは、手づくり、手弁当式の、手工業的プロセスによる、ということから出発する。二十人近いゼミ参加者全員が協力してガリを切り、刷る。従ってきわめてプリミチヴな製作品となつたが、それでよし、という姿勢を貫く。

そして、手本にさせてもらったのは、北川太一氏の『光太郎資料』と初期の『古典と近代』で、いずれも「ガリ刷である」とも綴られている。

この「あとがき」を読んでいる読者の方々にとって、二〇〇七年時点ではまだ「ガリ刷」ということばに細かな注釈がいたると思えないのだが、ことばは知っていても鉄筆を握ってロウ引きの原紙を切つた経験があるという人は、研究者人口の中では少数派になつてきたのではあるまいか。今年五十歳になる私の世代が、大学から大学院にかけての時期にガリ切りの筆耕をした最後である。大学院一年生の九月にこの『研究と資料』第十二号で謄写版印刷をした後あたりから、ほんのつかの間のボールペン原紙時代を経て、あれよあれよとコピーが普及し出した。

一八九四年に堀井新治郎・耕造という親子が私財を投じて開発したガリ版Ⅱ謄写版は、日清・日露戦争で需要を急激に伸ばし、官報や学校教材、ビラの印刷などに広く利用された。歴史の詳細は、須永襄編『昭和堂月報』の時代 戦前戦後「ガリ版」年代記』（大日本印刷ICC本部、二〇〇〇）に譲るとして、そのお仕舞いのところに『近代文学 研究と資料』のメンバーは、この技術の恩恵に浴していたことになる。

今回、大学院生たちが自分たちの論文のファイルを持ち寄って、研究室で版下を作成している様子を眺めながら、きつと何十年か後に『あの頃は、DTPなんて不便で手間のかかるやり方しかなかったんだよなあ』と思いき起す日があるだろうと思った。そのときにはどんな新技術が開発されているのか、もしかしたら紙媒体の本や雑誌を出すこと自体が、「特別に贅沢なこと」になっているかもしれない。そんなことを考えたのは、作業をしている脇に、ガリ刷の十二冊があったからである。

パソコンの普及と印刷の低コスト化によって、雑誌や書籍が安価で頻繁に刊行されるいま、「書いたものを公けにすることの重み」をどこに置いたらよいのか。そのことを執筆や編集の過程で自分たちに問い続けるために、新たな雑誌の創刊ではなく、『近代文学 研究と資料』を復刊することにした次第である。

本誌のほとんどの執筆者たちにとって、今回の論文が「書いたものを公けにする」最初の第一歩となる。今後、どれだけたくさんの文章を活字にする機会があっても、初心を忘れないというのは大切なことだろうと思う。ものには始まりというのがある。その始まりをともに分かち合えるというのは縁があったということだろうし、奇跡のように素敵なことでもある。現在は第一次のころに比べて、文学研究を取り巻く環境も学校現場の状況も、確実に厳しくなっている。自身の中から汲み上げたことばの力を信じて、世に踏み出したときの初志を、忘れてはやっていけない。

なお、第二次の刊行を期に、第一次全冊の目次をウェブ上に公開することとした。ご関心をお持ちくださった方は、早稲田大学金井研究室のホームページ (<http://www.f.waseda.jp/kanaike/>) を参照されたい。